

連載

石ノ声

ishi no koe

流れのある石

石材新聞特派員 林茂雄

「懸情流水受恩刻石」

茨城県のとある墓地でこの言葉に出会った。「情けを懸けしは水に流し、恩を受けしは石に刻むべし」と読むこの言葉は、自分がかけた情けはすぐに忘れ、人から受けた恩は忘れるな、という意味である。

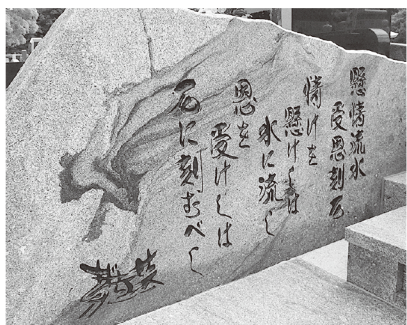
この素晴らしい言葉が刻まれていたのは墓所の外柵で、そこに用いられていた石もまた秀逸なものだった。水墨画のような流れ模様はグラデー

いて特に注目される石材店である。

神永さんは、真壁石の中でも流れ模様のあるものをあえて選び、採掘元の協力も得て「桜川まかべ石」と名付けてブランド化。自然が作り出したデザインを付加価値としてそのまま活かし、案内していただいた墓所の外柵や床面に使っていたのである。石碑に用いられるのは、皮肌を活かした伊達冠石である。

この墓所を案内していただいたのは、石工事をした有限会社神永石材（茨城県北茨城市）の神永大輔社長である。同社の取り組みについては本紙今号の3面でも紹介しているが、建築材としても墓石材としても、個性的な国産材を扱う点にお

にしてブランド化する動きはあったし、テンプルなどの石製品に利用したものを見掛けることもあった。SDGsやサステナビリティ（持続可能性）という言葉によって、国際的に地球環境の問題がクローズアップされている昨今、採掘した石材の有効活用の観点は重要であり、それはまた採掘元の健全な経営を助ける



流れのある石（桜川まかべ石）を用いた野趣あふれる外柵

ことにもつながる。

しかしながら、神永さんが流れのある石を選んでいるのは、そうした俯瞰的な視点よりも、もっと個人的な視点ないし趣向で、神永さん自身が流れのある石に魅力を感じているのである。当然ながら、どんな流れ模様でもいいというわけではないし、それぞれのケースに応じたふさわしい流れ模様があると思われる。

「懸情流水受恩刻石」と刻まれた外柵の流れ模様は、流れる水をイメージさせるものであり、その言葉はまさに「石に刻まれていて。流れのある石を用いたこの墓所を見て「流石」と感じた次第である。